

## 編集後記

昨年一月、全国高等学校国語教育研究連合会の第一七回大会が東京で催された。その大会で都立両国高校（定時制）教諭の堀江忠道氏が一つの研究報告をしている。定時制の四年生に卒業『研究レポート』作成の指導をしたところ、昭和五五年度においては全員が四〇〇字詰二〇枚以上、五八年度においては全員が三〇枚以上のレポートを提出したというのである。（本年三月の卒業生も五八年度と同様だったという）

私も以前同校に勤務し、二年ほど堀江氏と仕事をすることがあるが、同校では当時から、どんなに低学力であっても入学希望者のすべてを受け入れていた。それを思うと堀江氏の教育成果は瞠目にあたいる。

堀江氏の報告にはいくつかの特色がある。

一、定時制の生徒たちは「教科」の枠内で見るとたしかに知識に乏しいが、オートバイなどのこととなると驚くほど豊富な知識を持っている……として、その知識と興味を指導に活用している点（発想の転換）

一、レポートは卒業学年の一年間をかけて書かせるのだが、その作成指導のために四年間の指導計画を練りあげている点（指導の計画性）

一、「レポートのテーマは自由」としてあるので、生徒は「国語」以外の分野にテーマを求めることもある。その際には理科・社会科などの先生方の協力をえている点（集団としての教師の取りくみ）

一、右の指導法を確立するまでに八年の歳月をかけている点（研究の長期継続）

この報告は本年七、八月号の『月刊国語教育』に連載予定であるが、堀江氏の研究も初めから完成していたわけではない。私が同校に勤務していた七、八年前にはまだ単なる見通しと抱負の段階にすぎなかった。それが、何度かの研究会参加と発表の機会をあたえられ、助言と激励を受けているうちに見事な実践研究として結実したのである。

今日の教育の場は激しい変化と混乱の中にあり、研究がまとまるのは容易ではない。新しい発想で取りくみを始めている方々は、未完成であっても発表してくださいとすれば他を裨益するところも多いのではない。

森本真幸氏は三十年の教職経験を持つベテラン、村井朱夏氏は私立女子高校の講師を三年目という新進女性教師。古井純士氏は三十代後半の中堅教員、数々のすぐれた教育実践報告をされているが、今回は教材研究の一つのサンプルとなった。田島伸夫氏は中学国語教育の世界ではつとに令名が高い。ご多忙のところを無理にご執筆願った。中学と高校の一貫した国語教育を考える本学会に新風をもたらすことであらう。

（佐野斉孝）

早稲田大学国語教育研究 第五集

一九八五年六月一日 発行

発行所

早稲田大学国語教育学会  
東京都新宿区西早稲田一六一一  
早稲田大学教育学部内  
振替 東京六八五二七番

印刷所

早稲田大学印刷所  
東京都新宿区戸塚町一〇三